

恵那山学会ニュース

第12号 2008-5-15



恵那山学会

<http://www.enasan.info/>

〒508-0011

岐阜県中津川市駒場 398-8

金井 方

恵那山研究・第3号 発行

恵那山学会誌「恵那山研究」第3号が発行されました。A4版100ページです。会員に皆さんには1冊あてお送りしました。まだ若干残部がありますので、会員には1,000円、会員外には2,000円でお分けします。4号、5号と毎年発行できることを願っています。

年会費の変更と家族会員制度の導入

3月16日に開催された総会での決定に基づき、年会費を変更しました。

正会員 3,000円/年(元6,000円) 家族会員 1,000円/年(新設)

ただし、家族会員制度については、会則の改定を要するので、暫定導入です。H20年度会費として6,000円払い込み済みの会員には、原則として返却せず、2年分の会費としていただきます。

この改定の目的は、会員の増強と、活動の活性化です。ご協力をお願いします。

セイタカアワダチソウ試食会 花粉症になるとか、かぶれるとか、皆に嫌われているセイタカアワダチソウの試食会を行います。

日時：5月21日(水) 10:00から12:00、場所：中津川市中央公民館

内容：セイタカアワダチソウ および その他 珍しい野草の天ぷら、お浸しなど。平日ですが、是非大勢のご参加をお願い致します。セイタカアワダチソウの美しさを再発見することになると思います。面白い話の種にもなると思います。担当は堀井さん(管理栄養士)です。

乾燥させて風呂に入れれば効果があるとも言います。キク科の植物ですので味は苦味のある大人の味です。天ぷら向きです。当日はそのほかの珍しい野草も用意する予定です。ピオラソロリア(スミレ)も用意します。

第10回 恵那山の植物観察会実施： 5月11日(日)曇り時々小雨 今年度になって初めての植物観察会が、富士見台の万岳荘から神坂神社の旧東山道で行われました。参加者は15名(内・会員2名)でした。

この日の入会申込者は、今年度からの入会と認め、「恵那山研究」の進呈と参加費を無料とし、7名が新規に入会されました。この観察会の報告などは、6月15日号で掲載します。

(当日観察した植物の一部を最終ページに掲載しておきますので、記憶の確認にご利用ください)

恵那山ウエストン公園への黎明 (その1)

田畑 真一

平成13年3月のことだった。中津川市観光協会(前田青甫会長=当時)から丁寧な依頼状が舞い込んだ。同観光協会の内外にウエストン(1861-1940)の胸像を設置したいとの案が浮上。私には現地に来てもらい、助言を受けたいとの依頼だった。ウエストンとは英国人宣教師にして、わが国最初の山岳会・日本山岳会の設立を督励、近代スポーツ登山の父とたたえられている。

現地の中津川市川上には立派な胸像が

設置され、恵那山ウエストン公園も造成された。更に毎年、恵那山ウエストン公園祭も行われている。

私は当時、文書並びに口頭により、私なりの提案を申し上げた。すでに7年ほど前のことになるが、提言も胸像や公園の設置経緯をめぐる1資料になるうかと考える。そこで以下に再記してみることにした。



ウエストン公園の胸像
(中津川市中津川川上)
(金井孝素氏撮影)

1. 設置目的

設置目的や設置月日、場所などについては明文化された企画書を作成され、自治体や観光協会・各種団体・報道機関などへのご挨拶・ご案内をされると良いと思う。その時点で、胸像の形状・大きさ・材質・付帯設備が定まっていると具体的であり、わかりが良いと考える。なお、駐日英国大使館と日本山岳会とにご挨拶をされておかれたら、いかがなものか。

<駐日英国大使館>

東京都千代田区 1 番町 1 番地、電話 03(3265)5515(代表)FAX03(3261)4441

<社団法人日本山岳会>

東京都千代田区田辺 4 番町 5 番 4 、

電話 03(3261)4433(代表)、FAX03(3261)4441

イベントなども観光を目的とした内容のものは避けたい。近代スポーツ登山を岐阜県の山々などで先鞭をつけたウェストンであればこそ、彼を敬慕し、恵那山や神坂峠などを世界に向けて紹介した彼の遺徳を顕彰したい。健全なスポーツ登山を私たちが推進していく上での記念なり、よすがともしたいなどの内容も設置目的に盛り込まれると良いと思う。

胸像が設置場所周辺の自然を傷つけることなく、寧ろ自然との調和を配慮したプランであることは当然だ。それに彼の事績にちなんだ設置場所であることも望まれる。

2. イベントの企画時に

イベントが企画されるようなとき、前記の英国大使館や日本山岳会にも案内状を配慮されると良いと思う。

(日本山岳会 資料映像員)

恵那山雑感 (珍説)『ちはやふる』(2)

張 山 勇

万葉集は、現存最古の歌集で、仁徳天皇の皇后の歌といわれるものから、淳仁天皇時代の歌(759年)までおよそ4百年間、約4千5百首が収められている。

地方豪族から現地採用された最下級の官吏の子である、防人忍男の歌「ちはやふる」は、755年2月だから、締切り直前にギリギリで、間に合ったということだ。

ちはやふる 神代も聞かず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは

在原業平朝臣「古今・五・秋下・二九四」

不思議なことの多かった神代の昔でも、こんなことは聞いていない。この竜田川の水を真紅にくくり染めにするというのは、

「ちはやふる」は「神」の枕詞。「からくれなゐに水くくる」とは、川の水面に一面に紅葉が流れているさまを見立てていったもの。

「百人一首」は、「水くくる」を「水くぐる」とよみ、定家の時代長く「水潜る」と解されていた。(古語辞典)

作者在原業平(天長2年~元慶4年)は、六歌仙の一人に数えられ、「伊勢物語」の主人公と目されている。伝説化されて色好みの典型的な美男子とされ、能楽や歌舞伎、浄瑠璃にも取材された。又権守として美濃国とも縁があった。

横丁のご隠居の迷解説でお馴染みの、落語「ちはやふる」の筋書きは、確か次のようであったと記憶している。

売れっ子花魁、千早太夫に今をときめく江戸の大関「立(龍)田川」が、一目惚れして言い寄ったが、寄りきることが出来ず、逆に肘鉄砲を喰わされて、ものの見事にうっちゃられた。

やむなく千早の妹分、神代を口説いてみたが、「わちきも、嫌でありんす」と中々聞き入れてもらえなかった。振られて落胆した「立田川」は、廃業して郷里に帰り、家業の豆腐屋を継いだ。

何年か経ったある日、勝手口にみずぼらしい身なりをした女の人立っている。主の元大関「立田川」が出てみると、「ここ数日、何も口にしておりません。せめておカラなりとも恵んで下さい」・・・目と目が合った。

「な、な、なんと！」忘れもしない千早太夫の成れの果であったのだ。あれ以来、傷心の癒されることが無かった「立田川」は、これを断った。世をはかなんだ千早は、そばの井戸へ身を投げて溺れ死んだ。

ここまで何とかすり抜けてきたご隠居さん、「水くくる」に続く「とは」とは、何か?と聞かれてグッと詰まっ

た。

「とは」?・・・苦し紛れに「ちはや」は、源氏名で、その本名だ。

ホッ、やれやれ・・・と。

大相撲の年寄名跡（親方株）に、「立田川」がある。

第42代横綱鏡里 青森県出身、時津風部屋、身長5尺8寸（175cm）体重44貫（165kg）横綱在位5年（昭和28年2月～33年1月）引退後、年寄名跡「立田川」を襲名し、部屋を興して弟子を養育した。典型的なアンコ型で、右四つに組とめ、相手をタイコ腹に乗っけての寄りを得意とした。

最近の放送では、あまり耳にしなくなったが、アンコ型とは、立派な太鼓腹をした肥満体のことである。アンコを詰めた饅頭のようにふくらとしていたから、そういわれたのであろうか。今でいうメタボだ。

その頃の相撲界は、引退後プロレスに転向した第40代横綱東富士、筋肉隆々、^{ひとつまみの}突張りを武器にして横綱に駆け上がった第41代横綱千代ノ山、美男子横綱吉葉山（第43代）等が活躍した。

一突半とは、立合い右からの一突で土俵際まで突飛ばし、次に左手の半突で相手が土俵を割ってしまうほど威力があったからそう呼ばれた。後には、九重部屋を興して北の富士、北瀬海等を育てた。横綱返上問題や、出羽の海部屋のタブーを破って独立し、一門から破門される等の話題も提供した。

ヒガア～シー～ 鏡里オ～、ニシ～イ～千代の山ア～ア～

雑音とともに流れてくる「五球スーパーラジオ」の声に、手に汗を握ってかじりついたものである。テレビが登場してプロレスが流行し、年六場所制となって栃若時代を迎えるのが、昭和33年からだ。

相撲の歴史は古い。「古事記」にも建御雷神と建御名方神の「力くらべ」の説話がある。建御雷神に関係あるかどうかは知らないが、年寄名跡に「雷」がある。

古代における相撲は、作物の収穫を占う「神占い」の「まつりごと」と結びついて行われていたとも云われる。現在でも各地で行われている「神事相撲」や祭礼の際の「奉納相撲」はその名残だろう。土俵の四本柱に載っている（今は天上から吊り下げられている）屋根は、伊勢神宮などの屋根と同じ「神明造」である。

相撲の語源は、争うというの意味の「須未布」が「すもう」になったともいわれる。「すまふ」は、大陸からもたらされた各種の楽舞が面をかぶり、装束をつけて行われたのに対し「力くらべ」が素裸の演練であったところから、「素のまひを取る」と呼ばれ、それが転じて「すまふ」となったとする説もある。

聖武天皇（在位724～49年）のころ、7月7日の七夕祭の余興として毎年、天覧相撲を催すのが恒例となった。（世界大百科事典）

昭和天皇は大の相撲ファンで、国技館にお見えになったときは、どの力士にも公平に応援された。

聖徳太子が、冠位十二階の制度を定めたのが、推古⁶⁰³年である。冠位の「冠」とは、頭のかぶりもの即ち「帽子」のことで、最上位を大徳と云い、紫色で表した。

行司の最高位を立行司と云い木村庄之助が代々勤めており、結びの一番を合わせるのみである。軍配（団扇）の紐から烏帽子の顎紐、直垂の菊綴などすべて同色であり、総紫紐は、庄之助一人に限って許された特権である。世が世であれば庄之助さんは、さしずめ「大徳」だったということか。

内閣の決定により、天皇の発する衆議院の解散詔書は、いわゆる「紫の袷紗」で、包まれている。

神に仕える巫女は、潔斎し「筆」を身につけて祈ったのであり、力士は土俵に上がる時は、「力水」で口を漱ぎ、「化粧紙」で、身体を拭って潔斎し、塩を撒いて土俵を清め、ちり（塵浄水）を切って仕切りをし、「筆」のかわりに「禪」を締めて「神事相撲」を行ったのである。

「筆」（巫女）も「禪」（力士）もこと「神事」に関して相通ずるものがあり、落語の「ちはやふる」に「立田川」が登場するのは頷ける。あながち「迷解説」とばかりは云い切れないではないか。

（2008年2月27日）

岩石の分類と名前（藪睨みの解説）（3）

金井 孝素

火成岩の分類と名前については既に述べた。ただし、それはかなり歯切れの悪いものであった。ここでその言い訳がましいことを言わなければならない。そのために、火成岩の元になるマグマがどのようにして岩になるのか見てみる。（この辺りは、山賀進氏の次のWEBサイトを参考にした）

（ <http://www.s-yamaga.jp/nanimono/chikyu/kaseigan-02.htm> ）

マグマはカンラン石の上部マントル層が融けて、玄武岩質マグマができるというから、最初は玄武岩質（SiO₂ 45～52%）である。それが冷える過程で色々な火成岩になっていくわけである。

1．結晶分化

玄武岩質のマグマが冷えると、固体と液体が混ざった状態になり、冷えるに従って固体の割合が増して来る。液体から結晶が出てくることを晶出というが、晶出する固体の成分は、そのときの温度と（残った）液体の成分によって変わる。晶出した固体は、沈殿し、また再溶解する場合もあって複雑である。

2．結晶化の順序

- 1.1 玄武岩質のマグマからカンラン石、斜長石（Caに富む）が晶出する。
 - 1.1.1 急速に冷えると玄武岩になる
 - 1.1.2 ゆっくり冷えるとはんれい岩になる
- 1.2 更に残ったマグマの温出が下がると安山岩質マグマになり、輝石、斜長石、角閃石が晶出する
 - 1.2.1 急速に冷えると安山岩になる
 - 1.2.2 ゆっくり冷えると閃緑岩になる
- 1.3 更に残ったマグマの温度が下がるとデイサイト質のマグマになる
 - 1.3.1 角閃石、斜長石（Naに富む）、黒雲母が晶出する
 - 1.3.2 急速に冷えるとデイサイト岩になる
 - 1.3.3 ゆっくり冷えると花崗岩になる
- 1.4 更に残ったマグマの温度が下がると流紋岩質のマグマになる
 - 1.4.1 黒雲母、斜長石（Naに富む）、カリ長石、石英が晶出する
 - 1.4.2 急速に冷えると流紋岩になる
 - 1.4.3 ゆっくり冷えると花崗岩になる

こうなると、花崗岩や流紋岩についてはスッキリしたような気分になるが、実はそうではないらしい。このような分化によってできる花崗岩は、5%程度だという。ところが地球上には大量の花崗岩が存在している。もっと、ほかの成因があるらしいが、そこまで踏み込むと私の頭がつかない。ここでは素朴な疑問を提示して終わりにしたい。

【黒曜岩の作り方】

黒曜石は、流紋岩質マグマが急冷されて、ガラス状に固まったものである。先年、小秀山火山を見学したとき、黒曜岩の地層を見た。霧が峰一帯には3kmもの厚さの地層もあるという。1mを超す標本もあるという。このような大きな塊がガラスのまま固まるには特殊な条件があるだろう。それは何だろうか？

玄武岩質や安山岩質のガラス質岩がないのは何故だろう？

古東山道の植物

（5月11日の植物観察会で観察したものの一部です。図鑑での調査などにご利用ください。）

アサノハカエデ、イヌブナ、イワウチワ、イワガラミ、ウラジロモミオオバギボウシ（トウギボウシ）、カシミザクラ、カラマツ、ギンリョウソウ、シナノザサ、コアカミゴケ、コセイタカスギ、コメツガ、ササユリ、サルオガセ、サルノエビフライ、シシガシラ、シノブカグマ、ショウジョウバカマ、ズダヤクシュ、タチツボスミレ、タニギキョウ、タラノキ、タンナサワフタギ、タケシマラン、ツクバネソウ、ツルリンドウトウゲシダ、ナナカマド、ニガイチゴ、ニシキゴロモ、ニッコウネノメ、ヌカボシソウ、パイカオウレン、ヒカゲノカズラ、ヒメオドリコソウ、ヒメコマツ、ヒメカンスゲ、ヒメハギ、フモトスミレ、フモトミズナラ（モンゴリナラ）、ブナ、マムシグサ、マユミ or ツリバナ、ミズナラ、ミツバツチグリ、ミヤマエンレイソウ、ミヤマキケマン、ミヤマハンノキ、ムラサキケマン、ヤシャビシャク、ヤマジノホトトギス、ワチガイソウ、ワラビ後日、上杉インタープリターから連絡がありましたので、追加して掲載します。

11日の観察会で神坂神社近くに落ちていたマツぼっくりはその大きさからドイツウヒが有力です。クリスマスツリーに使われる樹種です。ドイツウヒはかねてから国内でも植栽される例があり、図鑑にもよく掲載されています。また神坂峠付近のサクラはミネザクラのようです。（上記のカシミザクラはミネザクラの方が有力と言うことです）